

目的

那珂川のアユ資源を持続的に活用するためには、漁獲の動向を把握した上で適正な漁場運営を行う必要がある。そこで今年度も引き続き、那珂川におけるアユの漁獲状況に関する情報を収集した。

材料および方法

友釣りによる漁獲状況 栃木県那珂川漁業協同組合連合会会員 4 漁協に対し、調査票 150 枚を前年度の賦課金納入者数の割合に応じて配布した。各漁協がそれぞれ選定した調査員に対し、6 月 1 日の釣り解禁から 11 月 10 日までの間、釣行日の釣獲地区（本流 7 地区および 4 支流の計 11 区域；図 1）および釣獲尾数（釣果なしも含む）の記録を依頼した。無記入の調査票は、出漁日数を 0 として扱った。なお、回答率は 80.0%であった。

投網による漁獲状況 釣りと同様の方法で調査票 50 枚を配布し、漁獲重量の調査を行った（投網は 7 月 10 日から区間毎に順次解禁される）。なお、回答率は 86.0%であった。

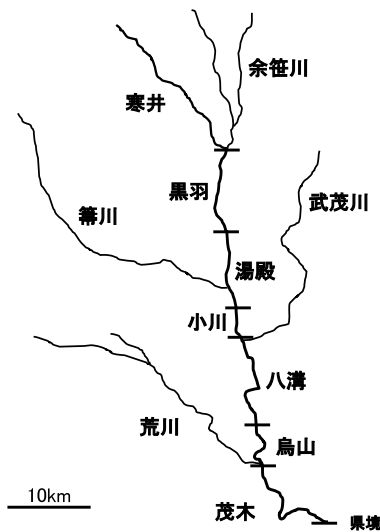


図 1 那珂川における釣獲地区の区分

結果および考察

釣れ具合・獲れ具合 釣れ具合は 10.0 尾/人/日で、前年（14.5 尾/人/日）の約 7 割ではあったものの、平年（10.0 尾/人/日）並みだった（図 2）。月別の推移を見ると、6 月から 8 月では平年を上回っていたが、9 月以降は下回った（図 3）。地区別に見ると、解禁日では寒井、余笹川、箒川、武茂川など本流の上流部や支流で高く、地区によって釣れ

具合の差が大きかった（図 4）。漁期を通して見ると、寒井で最も高く、本流の黒羽から烏山までの地区で低かった（図 5）。

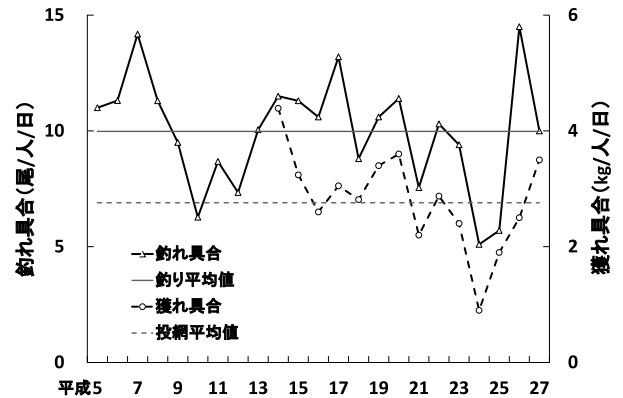


図 2 釣れ具合および獲れ具合の経年変化

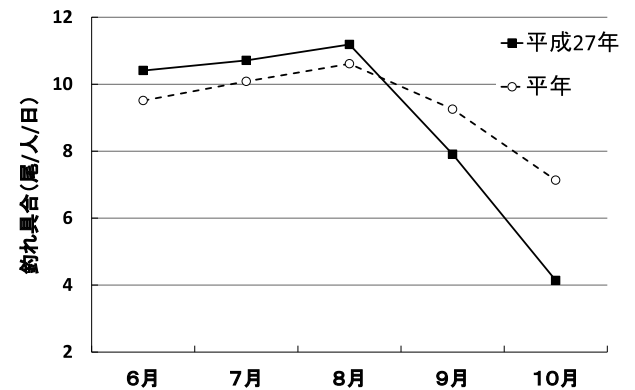


図 3 釣れ具合の月別の推移

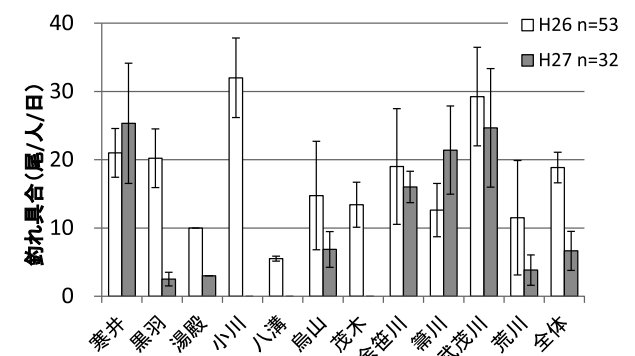


図 4 地区別の釣れ具合（解禁日）

エラーバーは標準偏差を示す。

解禁日および漁期全体ともに前年を下回る傾向が見られ、特に本流の黒羽から茂木地区にかけて釣れ具合の低下が大きかった（図 4、5）。

投網による獲れ具合は 3.5 kg/人/日で、前年（2.5 kg/人/

日)の約1.4倍、平年(2.8 kg/人/日)の約1.3倍と増加した(図2)。漁業者への聞き取りから、魚せきや通常の投網による獲れ具合が良く、かつ漁獲されたアユのサイズも大きかったことがわかり、このことが漁獲量の増加につながったと考えられる。

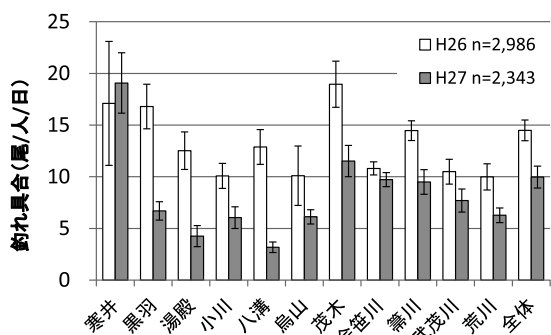


図5 地区別の釣れ具合(漁期全体)
エラーバーは標準偏差を示す。

出漁日数 釣りの出漁日数は18.6日/人で、前年(23.2日/人)の80.2%、平年(21.1日/人)の88.2%となった(図6)。釣れ具合は平年並みだったが、豊漁であった昨年に比べて低下したことが、出漁日数の低下に繋がったと考えられる。

一方、投網の出漁日数は12.0日/人で、前年(4.9日/人)の2.4倍、平年(11.0日/人)の1.1倍で、獲れ具合が良かったことが出漁日数の増加に繋がったと考えられる(図6)。

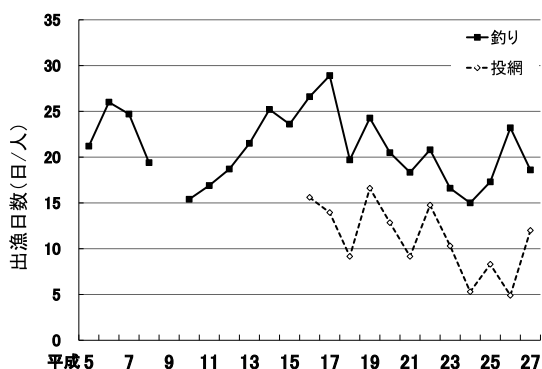


図6 釣りおよび投網の出漁日数の推移

釣獲尾数・漁獲量 釣りによる漁獲量は126.9tで前年(201.3t)の63%に減少した(図7)。地区別では、寒井、黒羽、碓氷川の順に多かった。前年を上回る漁獲量の地区も見られたが、全体的に前年を下回る地区が多く、黒羽、碓氷川地区などでは前年から大きく低下した(図8)。

投網による漁獲量は77.3tで、前年(26.4t)から約2.9倍に増加した(図7)。地区別では、烏山地区で全体の47%を占めるなど、前年と比べて漁獲量の多い地区が異なった(図9)。

出漁者数 釣りの出漁者数は19.7万人で前年(26.1万人)の75%だった。平成17年以降は減少傾向が続いていたが、近年では横ばいの傾向が見られた(図10)。

投網の出漁者数は2.2万人で、前年(1.1万人)の2倍に増加した(図10)。

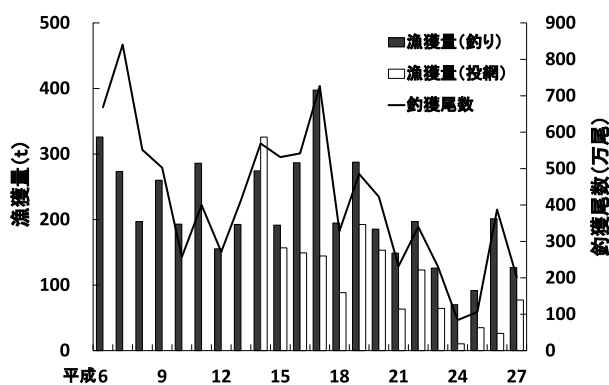


図7 釣りおよび投網による漁獲量および釣獲尾数の経年変化

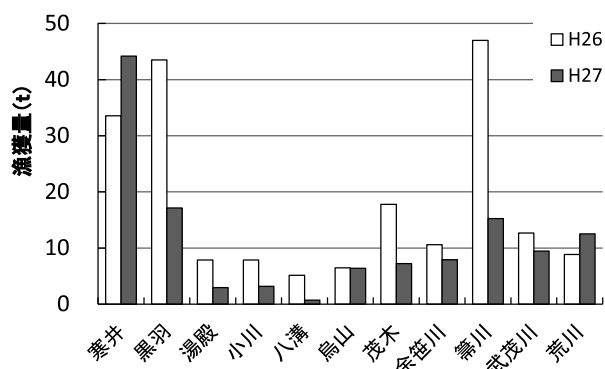


図8 地区別の漁獲量(釣り)

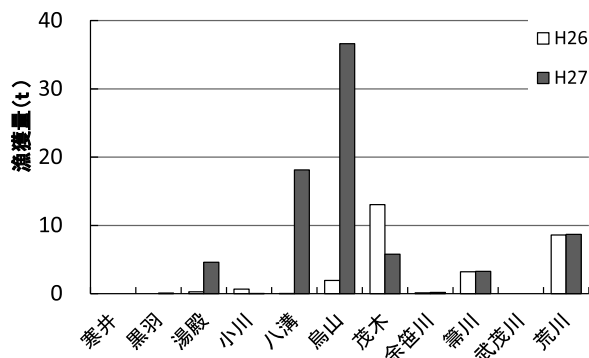


図9 地区別の漁獲量(投網)
※寒井・武茂川地区は釣り専用区

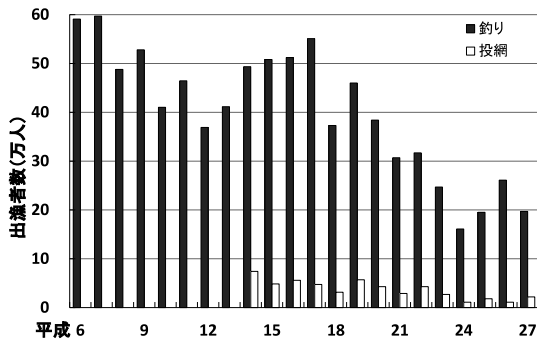


図10 釣りおよび投網出漁者数の推移

(指導環境室)